



退魔剣士

鎖夜

魔窟学園の罠

小説 酒井仁 挿絵 七輝静樹

立ち読み版

プロローグ	006
第一章 退魔剣士	018
第二章 淫卵胎動	057
第三章 退魔巫女ゆゆき	108
第四章 学園祭の淫戾	157
第五章 絶望によがる退魔剣士	198
エピローグ	249

登場人物紹介

Characters



しのめ きや 東雲 鎖夜

魔剣「餓牙」を振るう退魔剣士の一族の少女。幼い頃から魔剣の使い手として育てられたため、任務に対しては妥協を許さない堅物で生真面目な性格。実は甘いモノ好きで、お菓子をくれる人には懐く傾向がある。



こ み や ま て ま り 小宮山 手鞠

鎖夜が転校したクラスの級長。なかなかクラスに馴染めない（馴染む気がない）鎖夜を心配して、なにくれとなく世話を焼くようになる。



げんりゅういん

幻龍院 ゆゆき

鎖夜と同じく鬼怪を追って学園に転校してきた退魔巫女。鎖夜たち退魔剣士の一族を「邪道の技を操る者」と糾弾し、鎖夜につかかってくる。

が が 餓牙

鎖夜の一族が倒してきた魔物の「餓牙」を刀身に封じた意志を持つ魔剣。

鬼怪が好む生命エナジーとは人間の本能に根ざしたもの。すなわち生きようという力、子孫を生み出そうとする生殖本能。往々にして鬼怪は餌となる人間を性的に興奮させることで、その悦楽を貪るとされているのだ。

「私を興奮させて快感を与えようとでも言うのか。こんなこと、されたところで……ッ」心を強く保とうとするものの、正直鎖夜は不安を覚えずにはいられない。

幾多の鬼怪相手に死闘を演じたことはあるが、こんなふうに搦め捕られたことはない。

（痛みに耐えることなら自信があるけれど、鬼怪に辱められるだなんて……）

おぞましい怪物の糧にされてきた少女たちが、これまでどんな恥辱に晒されていたのか、鎖夜は初めて知った。

抵抗もできず自由を奪われ、全身に触手が這い回る不快感。身を隠すこともできず、ありとあらゆる恥部をまさぐられる屈辱感。それらは想像以上の嫌悪を感じさせる。

触手の群れはどんどんその数を増し、いまや退魔の少女は手も足も魔肉で塗り固められた奇怪なオブジェ。染み一つない白い肌はどこもかしこも粘液まみれでぐつしより濡れそぼっている。

（餓牙は動けない、手鞠は気絶している。いまはこの辱めに耐え続けるしかない）

見る限り、この鬼怪は原始的な知能しか持っていない。ある程度、鎖夜からエナジーを奪ってしまえば、満足するとまではいかなくても隙ができるかも知れない。

その一縷いちろの可能性に賭けるしかない。黒髪の退魔少女はもがくのをやめ、キッと顔を上げると唇を噛みしめた。

（好きなだけ私を弄もてあそぶがいい、だが私は屈しない！ 必ず隙についてお前を倒す、そして小宮山手鞆を助ける……ッッ）

うぞぞぞ……にゆるにゆる、にゆちつ、にゆちつ。

制服の中で無数の肉蛇が蠢き始める。

「ふああああッッ!! なつ、そ、そんなとこ……や、めろお………ッッ」

ぎゆるるつ、ぎゆりつ、きゆるんつ。ぬちゃ、にちゃつ。

たとえ鬼怪のなぶり者になつても簡単にエナジーを喰われはしない、そう誓ったものの、実際に不気味な肉蛇の愛撫に晒された少女は、想像以上の試練さいれんに苛さいまれていた。

もともと胸を強調するデザインの制服の、ブラウスの薄い布地の下で魔物の肉がうぞうぞと不気味に蠢く。ポリウームのある乳房はきつめのスポーツブラで押さえつけられていたが、触手はその内側にも入り込み、乙女の肉球を縦横無尽に揉みまくる。

「んふうっ! くっ、お、おっぱいの……先を、いじ、るな……あっ」

特に神経の密集している先端、桃色の可憐なぽっちりにも極細の肉紐が巻き付いて、きゆるんきゆるんとねじるようにつまみ上げ、刺激を与えてくる。

無論、その程度の痛みで音を上げる鎖夜ではない。ないのだが、刺激は痛み以外の感覚も少女にもたらし始めていたのだ。

（ち、乳首がじんじん痺れて、くすぐったいような、もどかしいような……腕や太ももを這い回られるのとはまた違う……な、なんなんだ、この感覚は）

年頃の少女にしては珍しく、鎖夜には自分で自分を慰めた経験も、知識すらない。

女体の中でニップルが性感帯だという知識を持たない鎖夜にとって、触手がどうして執拗にそこばかりを責め立てるのか、まるで理解できずに困惑してしまう。

（まさか、こいつらは女の身体の仕組みを理解しているとも言うのか？ わ、私自身でさえ知らなかった感覚を、こうも簡単に目覚めさせるなんて……自分が情けないッ）

初めて味わう乳首責めの快感から意識をそらせようと、血が滲むまで唇を噛みしめる。しかし左右の突起を同時に「くり、くり」とこね回されて、思わず「あふうっ」とおかしな声が漏れてしまう。びりりっ、と電気のような快感の波が肉球全体に広がって、背中にまで走り抜ける。

（くそっ、こんな程度の責めに屈するわけには……ッッ。これまでの厳しい鍛錬を思い出せ、気をしっかり持て、東雲鎖夜！）

鎖夜の一族の誰もが、魔剣を操って鬼怪を倒す剣士になるわけではない。

魔剣とは一族が数百年の歴史の中で滅ぼしてきた鬼怪の魔力のみを刀身に封じ込めた、

いわば「制御できる鬼怪」と呼ぶべき存在。故に素質のない者が剣を手にするや、その者はたちまち魔剣に意志を乗っ取られてしまうのだ。

魔剣に意識を乗っ取られない資質を持つ者だけが、魔剣を持つ資格を持つ。逆に言えば資質を持つ者は本人の意志とは無関係に、戦うことを宿命づけられる。鎖夜は数少ない資質を持つ者として、幼い頃から戦う術だけを教え込まれてきたのだ。

（その私がこんな……こんないやらしいことをされて、感じてしまうなんて）

思春期になって、乳房が膨らんできたときも、特に感慨はなかった。

自分の身体が女として成熟してきたというだけで、やがては一族の分家の誰かと見合いをさせられ、子を^な生し新たな一族を産み育てていくのだろう。そんな漠然とした未来図が少しだけ現実味を帯びただけだ。

でも、違う。最近スポーツブラに収まりきれなくなってきた豊かな乳房は、男の欲望を喚起させるもの。桃色の突起物は赤ん坊に乳をやるだけでなく、男に愛撫され、快感をもたらしてくれる器官でもあるということを、鎖夜は初めて知ったのだ。

ぷちっ、ぷちぷちっ。ブラウスのボタンがついにはじけ飛び、スポーツブラが露わになる。ブラの布地はすでによれよれに伸び、肩ひもは張り落ちて丸見えも同然。ピンクのニップルがつまみ上げられ夜気に晒されると、乙女の柔肌が栗立ち、紅潮する。

時間をかけて弄ばれた突起はひりひりと痒みにも似た心地よさをもたらし、少女の性感

をさらに敏感にする。自分でも気づかぬうちに太ももを擦り合わせていたのは、まさにそこ、ショーツの内側がじつとり湿り、熱を帯びていたからだ。

「うあああつ、や、やめ、ろ……ッ。ひいんっ？」

乳房とニップルばかりを責め立てられていた少女の目が、驚きに見開かれる。

人外の怪物の底知れぬ欲望が、たわわな乳房以外にも向けられるのを、文字通り肌で感じたのだ。反射的に腿に力が入るが、内股に筋肉の筋が浮き上がろうとも、絡みついた触手の拘束はほどこけない。

「うあ、や、め……ひやひっ、お、お尻撫でるな……ッ」

シンプルなラインのショーツもちろんとつくに粘液まみれ。だがそれまで触手どもは乳房にばかり集中していて、下半身は敢えて放置していたのだ。

人間を糧としてきた鬼怪の知恵なのか本能なのか、彼らはニップルに十分な刺激を与え終えたと判断したようだ。そして次はいよいよ乙女の隠された花園に、その欲望の矢を突き立てんとしている。

（まさか、そんな場所まで……け、汚^{けが}らわしいッ）

そこが男女のまぐわいを為す部分であり、子を生み出す神聖な場所であるということは知っている。だが年頃の少女にとってそこは月に一度の憂鬱な客を排出する場所であり、排泄に用いる場所でもある。

自慰の経験すらない鎖夜にとって、そこは最低限清潔を保つべき部分でしかない。己の処女花弁がどんな色形をしているか、確認したことすらないのだ。

ぐに、ぐにぐにっ。にゆるっ、ぬめっ。

血管の浮き出た肉の蛇が、ショーツの上からその部分に粘液をなすりつける。

強すぎず、弱すぎず、知能があるとも思えない肉の紐は、少女の秘部をどう扱えばいいのか熟知しているように、リズムカルに花弁を擦り上げる。薄い布地は粘液にぐっしより濡れて、うちに秘めた柔肉の形をくつきりと浮かび上がらせている。

（し、視線を感じる……そんなはずなのに、触手に股間を覗き込まれてるのがわかる。ああ、私の汚らしい部分の奥の奥まで、覗き込まれてる……ッ）

目など持っていないはずの触手の視線が、秘所に突き刺さるのがわかる。ぷっくりと盛り上がった恥丘、二枚の貝の身が合わさったような花弁のひだひだ具合、そして絹糸のような黒髪と同じく漆黒のアンダーヘアの茂みまでも。

薄布一枚を通して、すべてがさらけ出されている。

人の生命を餌としか思っていない醜悪な怪物に見られているのだ。耐え難い恥辱に鎖夜の目尻に涙の粒が浮かぶ。それでも少女は、気丈に顔を上げる。

（冷静になれ、鎖夜。どれほど惨めな目に遭わされようが、それがなにほどのことだ。心さえ、信念さえ折れなければそれでいいッ）

しかし、残酷な運命はなおも可憐な乙女に無体な忍従を強いる。

ショーツの上から身を擦りつけていた触手が、下着の中に先端を潜らせてきたのだ。十二分に温もりを持ったそれは厚かましくも花弁を形作る肉溝に身を横たえ、「ずりりり……」「ぬるるろ……」とゆつくりといったぶり始める。

「んぐうつ？　く、ふうつ……んう、あああつ！」

鎖夜本人も知らない、とびきり敏感な乙女のウィークポイントが、切なく疼く。

淫貝の合わさった上端、包皮にくるまった肉芽は乳首にも増して神経の密集した部分。クリトリスという名の乙女の敏感スイッチを、触手は確実に探り当てている。

「んひつ、んふう、ふつ……！　な、なんだ、なにこの、こ、ふわああああッツ？」

しつかり拘束されているにもかかわらず、びくん、びくんと大きく鎖夜の腰が跳ね上がる。あまりの勢いに股関節が悲鳴を上げるが、反応せずにはられない。

（む、胸を弄られるのとぜんぜん違う……自分が自分の身体でないみたいで、こ、これは鬼怪の能力？）

しかし、それは初々しくも成長した女体が、然るべき刺激に対して真つ当な反応を示しているに過ぎない。ほとんど触れたこともない肉芽は刺激を受けて熱を帯び、疼く。

太い肉がぐりぐり押しつけられ、骨盤の奥まで振動がずんずん響く。痛みと言うほどのものではないが、激しく揺すぶられる胎内の奥から、「じわあつ」と熱い蜜が滲み出てく

るのを鎖夜は感じた。

「あ……な、なに？ お腹の奥が、あ、熱い……ッ？」

ぞりりっ、くちゅっ、ぴちゃっ。にゆる、にゅちっ、ぞりりっ。

すでにショーツのゴムは伸びきって、下着の意味はなくなっている。乳房同様、露わになった局部に、触手は長い体をうねらせ、肉ひだを、クリトリスを延々と責め廻る。

その執拗な愛撫は未開発だった処女の聖核を開発し、成熟した性感帯に育て上げていく。「じゅわっ」と蜜がこぼれ出ると同時に、鋭い快感が肉芽から広がっていく。

「ん、ひああっ。なんで……なにこれ、き、気持ちいい……？ 私、鬼怪に廻られてるのに、く、ううっ！」

こみ上げる快感を必死に堪えようと、鎖夜は目をギュッと閉じて感覚を遮断しようとする。しかしくちゅくちゅと局部と触手が擦れる生々しい音は防ぎようがない。いや、かえって視覚を遮断したことで、自分の恥ずかしい部分がどのように廻ら^{なぶ}れているのかが手に取るようにわかってしまう。

女として急速に開花しようとしている少女の蕾を、触手は焦って摘み取ったりはしなかった。十分に淫らに咲き誇らせてから、乙女の生命を吸り上げるつもりなのだ。

鎖夜も鬼怪の淫らな意図には気づいている。股間から来る未知の快楽に心を奪われまいと懸命に我慢するのだが、それを嘲笑うかのように淫肉蛇はふたたび桃色の敏感ニップル

への刺激を同時に開始し始める。

「うぐつ、うううッ。か、感じ、ない……感じたりなんか、するもんかッ。いくら辱められたって、鬼怪などに籠絡されて……た、たまるもの………かひいいんッ」

絞り出すように拒絶の声を上げ、必死に己を立て直そうとする生け贄少女の二つの乳首、そして儂^{はかな}げな下の茂みに隠れたクリトリスは容赦なくいたぶられ続け、鎖夜は苦悶とも愉悦とも取れるわななきを漏らしてしまう。

そのときである。

全身の筋肉を緊張させて、鬼怪の触手攻撃に耐えていた退魔の少女は不意に虚脱感に襲われた。張りつめていた緊張がほどけ、腰が抜けてしまいそうに体力が削られる。

口の中がねばつく。

心臓は早鐘のように鳴り響き、脳内の酸素が不足しているような感覚に意識が遠のきかける。そんな鎖夜の症状と裏腹に、全身にまとわりつく鬼怪触手たちは嬉しげに身をくねらせ、にちゃにちゃと体液を撒き散らし始める。

自分の身に何が起きたのか、鎖夜は一瞬で悟った。

——喰われた——！！

必死に快感を感じまいと堪えていたが、鎖夜の性感は否応なく開発されていき、性的な興奮は鎖夜のエナジーを活性化させていた。

鬼怪はそれを啜り上げ、自らの糧としたのだ。それにしても、なんとという虚脱感。日ごろ鍛練を積んでいる鎖夜でさえ、腰からへたりこみそうなほど体力を削られたのがわかる。同じことを一般人の、それも少女がされれば一瞬で昏倒してしまうのもわかる。

ふしゆるるる……きしゆるるる……。

無数の触手を生やした肉塊が不気味な声で唸る。手に入れた獲物を味わって満足しているようなおぞましい唸り声に、鎖夜は怒りを覚える。

「この………外道、が……ッッ」

鬼怪とは、こんな苦しみを人々に与えるのか。

自らの欲望のために人を苦しめ、時として命までも脅かす。そのおぞましさと凶悪さを身を以て味わったことで、鎖夜の中の鬼怪への怒りは青白い怒りの炎となって、いつそう燃え上がる。

（許さない……ぜったいに、許さないッ。これ以上、貴様たちを肥え太らせてたまるものかッ。私がお前たちを一匹残らず駆逐して、やる………）

だが、どれだけ怒りを募らせても、今の鎖夜には鬼怪を倒すどころか、拘束を抜け出すことすら出来はしない。先ほどの「吸引」でも鬼怪はまだ満足していないようで、股間を颯る触手の動きが激しくなってくる。

クリトリスを刺激する動きに加え、糸のように細い触手が肉ひだの隙間に潜り込んでき

てくすぐつたい。その一部がじわじわと胎内にめり込んでいくことに気づき、鎖夜の背筋に冷たいものが走る。

「やつ……くそつ、わ、私の中まで犯そうというのか？ そんな、ことは……ッッ」

極細の触手が膣に入り込んでくる、その痛みはなかった。

いや、いっそ激痛でも味わわされた方が気が楽だったろう。さんざんニップルとクリトリスを刺激され、肌に粘液を塗り込まれた女体は、むしろ触手の侵入にぞくぞくするような快感を感じている、そのことがなにより許せない。

みちゅみちゅみちゅ……ぬちゅ、くぱあ……いまだ汚れを知らぬ乙女の恥穴は左右に押し広げられていく。ぱつくりと開いた処女穴に一本、二本といやらしい肉蛇がかま首をくねらせながら押し入ってくる。

（ひい……う、内側、擦られて、なのに、背中ぞわぞわして、こ、このままじゃ）

快楽に屈した自分がどうなってしまうのか、今日初めて女の愉悦を刻まれた鎖夜には見当もつかない。つかないが、ひとたび悦楽に溺れてしまったら、逆転の目がないのは火を見るより明らかだ。

なんとしてでもここを凌ぎきって、鬼怪に隙を作らせなければならぬ。

それがわかっているのに、少女は為す術もなく唇を半開きにして、だらしなく舌を突き出し、喘がずにはいられない。



「あぁん、その可愛い声もたまらない……んっ、れろっ、ぺちやぺちや」

口の周辺にべつとりと蜂蜜がついても、少女は気にする様子もない。

甘い花の蜜で味付けされた滑らかな少女の肌の舌触りを堪能すべく、いつそう念入りに舌を這わせ、脇腹の神経を刺激し続ける。

かと思えば、フルーツ缶を手にした少女はシロップ漬けのサクランボを手に、延々とゆゆきの小さくも愛らしいニップルを舐め続けている。乙女の突起を覆っていたはずの生クリームは女生徒たちがすべて舐め取ったあとで、もちろん、その過程においてゆゆきの乳首はこれ以上はないというくらいねぶられ、吸われ、舌で転がされた。

「うふっ、ふふふ、サクランボよりもちっちゃくてかわいいゆゆきちゃんのおっぱい……ちっちゃいのに、こんなにつんつんにしこっちゃってるわ」

「ひぐっ、くすぐったいから……や、やめ……やめろおッ」

だがやめろと拒絶する声にも力がない。淫魔に操られている少女たちが、ゆゆきの言葉に耳を貸すはずもなく、さんざん刺激され充血した乳首にサクランボを擦りつけて遊ぶことに熱中しているのだ。

（こ、こんな……たたくすぐったくて、恥ずかしいだけだと思ってバカにしてたけど、こ、こんなことになるなんて）

全身の神経がかつてないほど高ぶっているという事実には、退魔巫女少女は驚愕を禁じ得

ない。だが、それはある意味で当然の帰結である。

少女たちには、体育教師のように荒々しい獣欲もなければ、乙女の純潔を散らす肉の凶器も持っていない。しかし、彼女たちはゆゆきと同じ年若い乙女であり、その肉体のどこをどのように刺激すればどんな感覚が得られるか、ある意味で男よりもずっと熟知しているのだ。

たとえゆゆきがお子様体型で経験に乏しくても、その肉体は程なく花開かんとする乙女の肢体。彼女たちはたつぷりと時間をかけて、決して乱暴ではない繊細な刺激を与え続けることで、ゆゆきの性感を徐々に、そして確実に開発していったのだ。

（ま、まずい、このままされるがままにされてたら、本当にヘンになっちゃう）
すでに時刻は夕方を過ぎてとうに夜。

学園祭の前日とあって、居残り徹夜は黙認されている。淫魔に操られていない誰かが異変に気づいてくれる可能性はあるだろうか。

いや……この場にいないのは級長の手鞠。もしも教師の見回りがあったとしても、口八丁手八丁でここに来させないようになどお手の物だろう。あるいは、手鞠を疑うことを躊躇っている鎖夜でさえ、簡単に言いくるめられているかも知れない。

「あ、あんたたち！　いくらこんなことやっても私はあの娘みたいにひいひいよがりだしたりしないんだからねッ。い、い、いくら続けても同じよ、さっさと手足のリボンをほど

きなさい!!」

こうなったら強がりでもなんでもいい、女生徒たちの注意を逸らしているうちに、自力で脱出を図るしかない。だが女子生徒たちはさして困惑した様子もなく、顔を見合わせては小首を傾げる。

「そうなの？」

「そうなのかも」

「そうなのかしら。でもまだわからないわ」

そう言ってまったくすくすくと笑いさんざめく少女たちの姿は、人に害なす怪物の傀儡には見えない。だが、彼女たちを取り巻く空気に何らかの変化が生じていることに、ゆゆきは気づいていた。

（なに……この甘ったるい香りは。バニラとか蜂蜜とか、そういう香りじゃない。もっと生々しいというか、動物的な匂い）

外見こそまだ幼いが、退魔巫女としてそれなりの修羅場をくぐってきたゆゆきの本能が警告を発する。だが実際に淫魔に襲われた経験のないゆゆきは知らない。

この鼻孔をくすぐる甘やかな芳香は、少女たち自身の身体から発せられているということ。思春期を迎え、一人の女性として男を迎え入れる準備を整いつつある、「牝」のフェロモンが、教室に漂い始めている。

「ああ、暑い」

ゆゆきの髪に頬ずりしていた少女が身を起こし、襟元を緩める。

鎖骨が覗くほど襟をはだけると、うつすらと桃色に上気した肌から汗が香る。

「そうね、ここは暑いわ」

「あたしもなんだか、身体が火照ってきたみたい」

次々に襟を緩めるクラスメイトたちの挙動に、ゆゆきは目を丸くする。だ少女たちは気にする様子もなく、あたかもここが更衣室であるかのようにしどけなく制服の前をはだけ、友人同士でしなだれかかり、悩ましい吐息を漏らし始める。

「な……なに、なんなのよこれ」

「くすつ、わからない……？ あたしたち、ゆゆきちゃんの裸を見て、興奮しちゃったみたいなの」

前をはだけた少女は自分で自分の乳房を持ち上げ、乳首を舌で転がす。同級生の豊かな胸に圧倒されるゆゆきの顔に、別の娘が同じくバストを押しつけてくる。

「ちよっ、うぶうっ」

「ねえ吸ってえ、おっぱい吸って欲しいのお。赤ちゃんみたいに、ちゅっちゅってしてえ」
手足を机に縛り付けられたゆゆきは、窒息しないようにもがくことしかできない。

むせ返るような少女の甘い体臭に頭がクラクラする。だが、変調を見せ始めたのはその

二人だけではない。

ある者は少女同士で抱き合つて唇を重ね、舌を絡めている。まるで恋人同士のようにうつとりと見つめ合い、唾液を交換するような濃厚なキスに夢中になっている。

またある者は、友人を机にうつ伏せに押し倒し、うなじに顔を埋めて熱い息を吹きかけながら、片手をスカートの中に差し入れ、もぞもぞと怪しい動きを見せている。愛撫されている方も決していやがっている様子ではなく、むしろ自分から足を広げ、身を委ねているように見える。

「あん、あふう……もつと強く抱きしめてえ……」

「あなたのここ、下着の上からでも濡れてるのがわかるわよ、ふふ……」

これは、淫魔……人の生命エナジーを喰らう怪異がいよいよ人間を餌にする光景に酷似していた。

人を惑わし正気を失わせ、理性を麻痺させることで、人間を本能のままに赴く動物にしてしまう。そして淫らな宴をさせることで、より純粋な性的興奮のエナジーを一気に喰らい尽くすのが、淫魔の常套手段なのだ。

（そ……それくらいは知ってる……わかった、はずだけど……まさかこんな……しかもお、女の子同士なのに！）

若い娘のエナジーを好む淫魔は多い。特に思春期の不安定な少女の精神には少なからず

男性に対する嫌悪感を持つ者が多い。

逆に言えば、男性よりは同性愛に対する抵抗の少ない少女が多いということ。ゆえに女子校や女子寮がしばしば狙われる……それは退魔の最前線で戦ってきた者なら誰もが知っている。だが、実戦不足のゆゆきにとって、同性で淫らな愛撫に身を任せ悶えている少女たちの光景は、ショックキングなものだった。

「みんな……ゆゆきちゃんのこと味見してるうちに、エッチな気分になって来ちゃったのよ……」

「怖がることなんかないのよ、女の子同士なんだもの」

「やつ、やめ、んむうううっ？」

有無を言わず唇を奪われ、ゆゆきの呼吸がショックで一瞬止まる。

ファーストキスに憧れを抱いていたわけではないが、初めての相手が女性だというのはショック以外のなにものでもない。

だが、少女たちの興味は唇だけではない。舌で唇をこじ開けようとする娘とは別に、二人の娘がニップルに取り付き、ちゅううちゅうれろれろと舌で乳首を転がし、頬をすぼめて吸引してくる。

（さ、さっきまでの舌使いとぜんぜん違う？ これっていったい）

裸身に剥いたゆゆきをデコレートして弄ぶのがじゃれ合いの延長なら、いまの少女たち

は完全に発情していた。

女として快感を味わい、愉悦に溺れ、そして相手にも味わわせて悦楽の交歓をしようという、明らかな性的行為だった。唇と乳房を嬲られるゆゆきは、両下肢にも柔らかなものが押し当てられるを感じる。

細くなよやかな太もものに巻き付いてくるのは女生徒の腕。そしてふによりと密着する球状のものは乳房に違いない。

「あはぁん、ゆゆきちゃんの匂いっつ」

「ゆゆきちゃんにも、あたしたちの匂い、いっぱい付けてあげるね……」

巫女少女の両下肢に取り付いた女子生徒たちは、乳房だけでなく全身をゆゆきの足に擦りつけるようにしては、淫らな喘ぎ声を漏らす。

ニーソックスにしこった乳首がコリコリ擦れ、爪先は股間に挟み込んでしたなく腰を痙攣させている。おそらく少女たちの秘奥はぐつしよりというらしいおつゆでしとどに濡れているに違いない。

彼女は——彼女たちはゆゆきをまるでオナニーの道具のように扱い、思い思いのやり方で悦楽に溺れているのだ。

そして、そんな牝の臭気を放ち続ける女生徒たちに囲まれ、むせ返るフェロモンを吸わされ続ける巫女少女の肉体に変調が訪れないと、なぜ言い切れるだろうか。

（なんか……私まで身体が熱く……うん、惑わされるなゆゆき！　こんなの、ずっと身体を弄り回されて混乱してるだけ……ッ）

きゅっと目を閉じ、唇を引き締め、舌の侵入を防ぐ。感覚を遮断してなにも感じないようにするが、呼吸を止めることはできず、耳を塞ぐこともできない。

悩ましい少女たちの喘ぎ声、興奮した息づかい、青い汗と少女特有の体臭はゆゆきの内側に入り込み、ただでさえ敏感になっている皮膚感覚を刺激する。

「はぁ、はぁ……んっ。ねえ、すごい私のあそこ……自分一人するときより、ずっとずっと濡れちゃってるの。ほら聞いて」

耳元で囁く少女の言葉に続き、「くちゅっ、くちゅっ」と湿った音が下の方から微かに聞こえる。見るまでもなく、女生徒が自分自身の秘所を指で弄っている音だとわかる。しかもその指使いは、ぬめった穴をかき回す淫らな音がますます激しくなっていく。

（自分で？　自分で自分の身体を弄って気持ちよくなってるの？　い、淫魔、淫魔に操られてるからよ。そうに決まって）

「うふふふ、あたしもそうよ、こんなに気持ちいいオナニーは久しぶり……みんなで見せ合いつこするのがこんなにいいだなんて、知らなかったわ」

彼女たちとて、せいぜいがたまに自室に閉じこもっていけない遊びに興じる程度のことをしてに過ぎない。

人前で、ましてや友だち同士で自慰を見せ合うなど考えたこともなかっただろう。だが理性と常識を麻痺させられた年頃の少女たちは、快楽に溺れることになんの罪悪感も抱いてはいない。

（私はちがうッ、こんな……こんなことしたくもないッ！ キスされたって、舐め回されたって、なんとも感じない！）

揺れ動く心を立て直そうとする巫女少女の股間に、「ふわっ」と生暖かい息が吹きかけられ、ゆゆきは思わず「ひゃうっ」と声を上げる。

「ここ……ここからいい匂いがしてくる……」

すんすんと鼻を鳴らすのは、足に乳房を擦りつけている少女。

制服も下着も脱がされてしまったゆゆきだが、ただ一カ所へソの下の下腹部だけは薄いクレープ生地がまだ乗せられたままになっている。小麦粉生地と肌の隙間に顔を近づけ、鼻をひくつかせる女生徒の顔は、少女らしからぬ色香に染まっている。

「ゆゆきちゃんの身体はどこもいい匂いがするけれど、この奥からは他のどことも違う香りがするわ」

二人の少女が競い合うようにゆゆきの股間に群がっていると、他の女生徒たちも興味をそそられ、我も我もと赤面するゆゆきをよそに下半身に興味が集中する。

「これは確かに興味深い香り。女の子の秘密の匂いがするわ……ねえ」

「こんなに愛らしいゆゆきちゃんなのに、ちよっぴり大人のフレグランス」

「でもこれだとみんなで味わうことができないわ」

そうねそうねと頷きあう少女たちの目は興奮に濡れ、薄いクレープ生地を透過してゆゆきの局部に突き刺さるようだ。

あからさまな視線を一心に受け、ゆゆきが平静でいられるはずもない。耳まで真っ赤になつて必死にもがき、クラスメイトたちを追い払おうとするが、動くことで逆に香りの微粒子が空中に撒き散らされ、女生徒たちはそれを堪能する。

「やめ……ひつく、それ以上は、やめ……」

同級生に股間の匂いを嗅がれるという辱めに、いつしかゆゆきはしゃくりあげていた。自分でも腹立たしいやら情けないやら、でもどうすることもできないのだ。

巫女少女の抵抗など敢えて無視するように、理性を失った残酷な少女たちは芳しさの源を開陳すべく、クレープ生地指をかける。

「ひっ、や、やめ………」

ぬちゃっ……それは汗、あるいは体温で溶けた生クリーム。

いや、持ち上げられたクレープ生地から糸を引いて伝うのは、まぎれもなくゆゆき自身が分泌した乙女の蜜液に他ならない。

微かな潮の香りをまとったそれは、幼さと女の香りの絶妙なバランスでその場の空気を

乙女色に変質させる。いまだ汚れを知らぬ花弁の垂らした極上の蜜液の芳香を胸いっぱい
に吸い込んだ少女たちの顔から、理性というものはただの一片も残らず消失していく。

あとに残ったのは、哀れな贖罪の羊を前に激しい欲情に支配された乙女たち。

「いいいいいい、いいかげんに放し……ひゃあああッ」

しゅるりと足首を縛っていたリボンがほどかれ、ゆゆきの両脚が持ち上げられる。

解放されたのではない、むしろその逆。そのままぐるりと足首が頭の真横にまで来るく
らい身体を折り曲げられると、股間が顔より上に持ち上がって、「まんぐり返し」という
恥ずかしい体勢になってしまう。

クレープ生地すら失った下肢のつけ根はほとんど無毛に近い局部をさらけ出し、と呻い
た蜜液で濡れた花弁に女生徒たちの熱視線が、熱い吐息が突き刺さる。

「な、なにっ、やめて、やめなさいよ……ッ」

女生徒たちの態度が明らかに変わったことに、さすがのゆゆきも声に怯えが混じる。

先ほどまで姦しくお喋りしながらゆゆきを弄んでいた少女たちは、誰一人口を開くこと
なく無言のまま、食い入るように巫女少女の股間を見つめる。

やがて、一人の女生徒が手にしたのは細身の泡立て器。

針金を曲げて作られた先端が膨らんだそれを垂直に立てて、下肢のつけ根に近づけると、
ゆゆきの目が驚きに丸くなる。

「なにをするの、なに考えてんのよ! やめ……やめてえええええええ」

くちゆつ。

くち、くち、ぐちゅっ……じゅぷっ、じゅぷ、じゅぷっ。

「いやああああ、冷たいっ、気持ち悪いッ。やめっ、か、かき回さないでええええ！」

ちよつとした材料を混ぜるのに使うミニ泡立て器は、処女膣にとつてもそれほど負担ではない。だが金属の棒状のものを局部にねじ込まれる恐怖に巫女少女はツーンと振

り乱して悶える。

「だいじょうぶよ……入り口をちよつとかき混ぜるだけ。でもこうすると、ゆゆきちゃんのおつゆが攪拌されて……ああ、なんていい匂いなのかしら」

くちゆつ、くちゆ、じゆぽつ、じゆぷつ。

「素敵な香り……ねえ、シロップを追加してちょうだい、もっと香りが立つはずよ」

「もつと嗅がせて、ゆゆきちゃんのシロップの香りを立てて！」

「いやあああああああああ」

じゅつぷつ、じゅぷ、ずちゅつ、ちゅくつ。

むき出しの美貝に黄金のシロップが滴り落ち、そこにミニホイップパーが差し込まれる。ぐりぐりと回転するにちやにちやと淫らな音が響き、少女たちはぐくりと生睡を飲み込んでそれを見守る。

「ひいひい、いや、いやあああ！ かき回さないで、やめてよおおお」

泡立て器は決して処女膜には達しない。それでも針金でできた先端が膣の入り口で回転すると、肉がゴリゴリと擦れ、少女の愛液は飛沫となって飛び散る。

「気持ち悪い！ お腹の中気持ち悪い！ やめて、お股くちゅくちゅしないで！ んひっ、ふひひいひい」

「ああもう、こんなに泡立ってますます香りが広がっていくわ」

「ゆゆきちゃんはきつと私たちのお店の大人気商品になるわね。じゃあ……そろそろ味見でもしましょうか？」

その言葉に女生徒たちの目に妖しい光が宿る。股間をかき回された哀れな同級生の裸身を見下ろし、舌なめずりをする女生徒たちに、ゆゆきの背筋が震え上がる。

「そうねそうね、お客様に満足して頂ける仕上がりかどうか、確かめておかないと」

「ああ、シロップとゆゆきちゃんのおつゆが混じったこの香り……ちゅぷっ」

「ひいひい」

ちゅぷっ、ちゅぱ、れろれろ……ゆゆきの股間に唇を押し当てた少女が、いやらしい音と共に巫女少女の処女蜜を啜り上げ始める。

「んふう、ちゅっ、んく……んっ。おいひい……なんておいひ、ちゅむっ、じゅるるっ」

「あら、独り占めはよくないわ。私にもねぶらせて」



そのとき——目に入ったのは、床に落ちていた生徒手帳。

誰が落としたものかはすぐにわかった。開いたところに貼られていたシールに写っているのは、鎖夜と手鞠。あれは、手鞠の生徒手帳だ。

『鎖夜、顔が堅いよく、もっと可愛いポーズで、ほら笑顔笑顔ッ』

『ちよっ、く、くすぐらないで……ひゃひッ』

鎖夜の脇腹をくすぐってヘン顔をさせようとおどけている、無邪気な少女。あのとき撮ったプリクラシールを、手鞠は生徒手帳に貼ってくれていたのだ。

ゲームセンターなど初体験の鎖夜を引っ張って、クラスメイトとの距離を縮めさせようとしてくれていた、その少女の心根が鎖夜を欺くためのものであったはずが、ない。

「ちがう……私は、私は手鞠を信じるッッ！ 手鞠の言葉が嘘だったなんて……手鞠が私を謀っていただなんて、そんなこと絶対に信じない!!」

ぎりっ、と唇を噛みしめて顔を上げた鎖夜の瞳に迷いはない。

確証があるわけではない。餓牙が手鞠を鬼怪だと言った理由もわからない。

だが手鞠が自分にくれたすべてのことが偽りだとはどうしても思えない。

確証はないが、確信ならある。手鞠は……あの無邪気でお節介で快活な少女は、鎖夜を友だちだと言ってくれた。自分は、友を——信じたい。

「手鞠は鬼怪なんかじゃない……私が、それを証明してみせるッッ」

「そう。でも時間切れよ、無能な退魔剣士さん」

「創造主様が覚醒されるための、贅にえとなるがいいわ」

ハツと気づいたとき、鎖夜の周囲には肉棒を勃起させた男たち。そしてその竿をしごき
たてるメイド少女。竿の先端を鎖夜とゆゆきに向け、激しく男根をしごき上げる。

「うほおおつ、出るッ、でるううッッ」

どぴゅつ、びゅるるつ。どく、どくんつ。

「く、黒髪メイドさんにぶっかけええええ〜〜〜ツッ」

どびゅうつ、びゅばつ、どびゅううつ。

幾筋もの白濁が放物線を描き、鎖夜と、半裸の巫女少女にぶちまけられる。

華奢な巫女少女にぶちまけられ、注ぎ込まれた大量の欲望……男の肉欲のエナジーが活性化する。人のもっとも原始的な本能である生殖を求めるエナジーを感じ、鎖夜の中の「卵」は一気に臨界点を越え、むくむくと膨張し始めたのだ。

「ううっ？ あ、あああ……うあああああ~~~~ッ。ぐひいいい……ッ」

ぽこつ、ぽこぼこぼこ……ッ。メイド服を押し上げ、明らかに鎖夜の腹部が妊婦のように膨らみ始めていた。内側から子宮を拡張される激痛に、たまらずゆゆきの身体を離し、腹部を押さえるが腹はどんどん膨らんでいく。

「ひぎ……うぎい
い
い
い
い
い
ツ
ツ
ツ」

むちっ……むちむちっ、ぷりっ、ぷりんっ。

肉体の変化は腹部だけではなかった。なんと両の乳房もみるみる風船のように膨張し、スポーツブラとメイド服の胸元を盛り上げ始めていたのだ。

（か、身体が……い、痛みが薄れていく？ 私の身体が、変えられていく！）

最初に感じた拡張の痛みは、すぐに治まった。その代わりに全身が恐ろしく敏感になり、鎖夜は乳首に突き刺さる鋭い快感に唇を噛みしめ、喘ぎ声を漏らしてしまう。

敏感になったニップルがブラの布地で擦れ、乳輪全体がじんじん痺れて火照っている。いまや完全に臨月腹となった腹部はみっちり重量感があり、ひとまず膨張は収まったものの、子宮に居座った鬼怪の卵は不気味に胎動を続けている。

「あふうんっ」

卵がびくりとふるえただけなのに、鼻にかかったような声が漏れてしまう。

ジャストサイズのメイド服の中で妊婦体型になってしまったため、お腹周りや胸の辺りがぱつつんぱつつんなのだ。おかげで、ほんの少しの振動で肌が擦れてしまう。乳首だけでなく、肌全体が敏感になっていて、擦れるだけで気持ちよさがこみ上げてくる。

突然巨乳の妊婦腹になった鎖夜を、メイド少女たちや男たちがにまにま笑いながら見下ろしている。燃えるような羞恥心で居たたまれないが、腰を浮かすどころか、身じろぎ一つただけで変な声が漏れてしまうのだ。

「すげえ……こんな可愛い娘が、目の前で妊婦になっちゃった……」

「なんてでけえ胸だ、も、もう辛抱できねえッッ」

ただでさえ大きな胸をスポーツブラで締め付けていた胸元は、いまにもボタンがはじけ飛びそうだ。二つの肉球の下には、丸々と膨れあがった腹が扇情的に波打っている。

メイドたちの手コキで発射したばかりだというのに、男たちは再びイチモツをそそりたせながら、鎖夜に群がってきた。

「うああっ？ や、やめろ、抱きついてくる、な……ッッ」

背後から抱きついてきた男の手が、パンパンに張りきった巨乳を下からゆっさりと持ち上げる。襟のボタンはついにはじけ飛び、重量感たつぷりの妊婦乳房がどちゃりこぼれ出て、男たちがどよめきをあげる。

「うおおっ、ぷによぷによでやわらけええ〜っ」

「乳輪がブラからはみ出してるぜ、なんてエロ乳なんだ」

はだけられた胸の上で、巨乳がゆさゆさ揉みしだかれる。別の男が正面から抱きついてきて、谷間に顔を埋める。熱い息を吹きかけられ、鎖夜の背筋がぞわぞわと痺れる。

「んひうつ、い、息、くすぐった……ああんっ」

「ちよつと汗ばんだ匂いがたまらねえ……ちよ、直接吸ってやるぜ！」

たちまちブラは引きむしられ、露わになった超巨乳に、二人の男が吸い付いてくる。背

後の男は下乳を揉みながら、少女の耳の後ろをちろちろといやらしく舐め回し、首筋やうなじの匂いを嗅ぎまくる。

（きもち、わるい……はずなのに、なんで、乳首がこんなに気持ちいいんだ……）

乳首だけではない、男のぶ厚い手が触れているところ全部が熱を帯び、少女にまぎれもなく快楽をもたらしている。これまで何度も鬼怪に操られた男に蹂躪された女体は、いまや愛撫に対してこれ以上はないというほど無防備になっている。

それが、妊婦腹にくわえて乳房まで膨張したことで、いつそう感度が上がっているのかも知れない。乳首を転がされ、ちゅうちゅう吸引されるだけで、力が抜けてしまう。

「ふぁあっ……そ、そんなに吸うな……あふううっ？」

「んおっ？　なんか甘い……こ、こいつ乳を出しやがったぞ！」

男は驚いて口を離し、乳輪をつまみ上げるようにしてピンクの突起を圧迫する。すると白い液体がびゅーっと細い筋を描いて噴き出したのだ。

「んんっ、こいつは甘くてうめえ、マジで母乳だぜ」

鬼怪の卵の影響なのか、妊娠したわけでもないにもかかわらず、鎖夜の乳首からは確かに甘い乳が分泌され始めていた。

男たちは先を争うようにニップルに吸い付き、吸い上げ、少女の母乳を貪り始める。発達した乳腺がむずむずとむず痒く、それでいて溜まった乳を搾り取られるのが妙に心地い

い。陶然となりかけ意識を必死に繋ぎ止めるが、それを見ていた他の男たちが、自分にも飲ませると騒ぎ始める。

「おう、こりや確かにおっぱいだ。女学生のクセに母乳なんか垂れ流しやがって、なんていやらしい娘なんだ」

「見ろよ、このボテ腹を。並のスケベ女の腹じゃねえよ」

そう言つてエプロンドレスの裾をまくり上げると、丸々と膨れた腹が露わになる。本当の妊婦腹ならいつ生まれてもおかしくない腹部で、下着も隠れて見えないほど。

メイド喫茶の客や男子生徒はその腹を見てはげらげらと笑い、乱暴に乳房を掴んでは母乳を絞り出してそれを飲み干す。そんな辱めを受け続けても、腰に力が入らないため立つこともできず、彼らをふりほどくことすらできないのだ。

「んひんっ、い、痛いから、そんなに強く揉まないでえ……ッ」

哀れな少女の訴えも、獣欲に支配された男たちにとつては興奮を煽るものでしかない。むしろ半裸に剥かれた妊婦姿を晒した少女を嘲笑い、辱めることでいっそうイチモツをそそり立て、乳首にむしゃぶりついてくるのだ。

「うっぶ……すげえなこのエロ乳は、あとからあとからエロ母乳を噴き出しやがる」

「吸われるばかりじゃ身が持たないだろう。オレがミルクを補給してやるとするか」
さんざん母乳を食っていた男が口元を拭いながら、ゆらりと立ち上がる。

その股間ではもう何度発射したかわからないにもかかわらず、隆々と反り返った陰茎。男は二、三回茎をしごきたてると、先端を鎖夜の唇にねじ込んだ。

「んぐうおおっ!？」

まったく油断していた退魔少女は、根本まで男の茎を突き入れられ、眼を白黒させる。息が詰まりもがく頭を乱暴に掴み、激しいイラマチオで少女の喉奥を犯す。乳房にはさつそく別の男が吸い付いている。吸われすぎたニップルは充血して痛いほどだが、その痛みさえも倒錯した快感を与え、鎖夜を困惑させる。

（ま、またこの臭いと味……男の、性器、精液をまた飲まされてしまうのか……ッ）喉を犯す男が何をしようとしているか、もう鎖夜には十分すぎるほどわかつている。

乳房で挟んだりくわえさせたり、はたまた排泄の穴に挿入したり……異性の性欲は、無垢な少女にはまるで理解不能なものばかりだった。

だが、イラマチオもパイズリもアナル中出しまで経験した鎖夜は、男の性欲がそういうものなのだとことを知った。そして、最初は痛みは不快感しか得られないそれらの行為でも、受け続ければいつしか愉悅をもたらすものだということを。

「そら、もっと舌を使えよ……それで、おねだりして見せな、おちんぼミルク飲ませてくださいってな！」

抵抗できない妊婦腹の少女の口を犯す、男の顔は醜い。欲望に染まった陵辱者の顔その



ものだ。舌の上に亀頭を乗せた状態でわざと鎖夜の口を大きく開けさせ、頬を突いてはその歪んだ顔を見て嘲り笑う。

かと思えば、唾液にまみれたそれを少女の端正な顔に擦りつけては、びたびたと陰茎で顔をひっぱたいて残酷な遊戯に興じる。

「おらどうだ、欲しくなってきただろう？ そんなエロ乳持ったドスケベ娘は、ちんぽが目の前にあると、興奮してしようがないんだろうが！」

ここで屈してはいけない、心折れてはいけないと強く自分に言い聞かせても、男の暴力の前に為す術もない。

そんな自分の置かれた状況に、ぞくぞくするほどの愉悦を感じてしまう。

「んぶ、あ……………くらさひ……………おちんぼ、ミルク……………ミルク、飲ませて、えっ」

ほとんど意識することなく、鎖夜はそう口にしてしまっていた。

「よし、いくぜ！ どびゅどびゅぶつ放してやるからな、ううおっ……………！」

がしゅがしゅがしゅと荒々しく腰を振るい、頬といわず食道といわず気管といわず、メチャクチャに肉茎を突き入れてくる、男の動きが不意に止まる。

びしゃっ、びゅるるっ、どく、どくんっつ。

熱い熱湯の塊が喉奥にぶつかってへばりつく。強烈なザーメンの臭いが鼻孔を駆け上り、嘔吐感がこみ上げるが、鎖夜はそれを白濁液ごと飲み下す。

粘性の高い子種汁が「ずるる……」と喉粘膜を擦りながら胃の腑に滑り落ちていくのを感じながら、少女の身体は軽いアクメの痙攣に包まれる。

(イッ……イッて、しまった………男性器をくわえさせられて、精液を飲まされて、イッてしまった………)

もちろん、それで終わりではない。イラマチオ男に興奮した男子生徒が直ちにイチモツを奮い立たせ、鎖夜にザーメンを飲ませようと唇にねじ入れてくる。

自分でも気づかぬうちに、鎖夜は頬をすばめて唇で茎を擦っていた。亀頭に舌を絡め、しょっぱい先走り汁をねぶり取っては、自分からそれを吸い上げて飲み下す。そうすることがさらなる快楽を誘発するのだと、自分の肉体が記憶しているのだ。

「おお、ちんぽをくわえた途端に母乳の出がよくなったぜ。とんだ淫乱ど変態娘だ！」乳首をこりこりしながら下品に笑う男に、鎖夜は反論する言葉を持たなかった。

「ちっ、オレの番はまだかよ。我慢できねえ、こっちでも使わせろ！」

「んひいんっ？」

メイド服の裾をまくり上げた男が、妊婦少女の尻を平手でひっぱたく。

尻に食い込んだショーツを力任せに引き破ると、鎖夜に尻を上げるよう命じる。言われるままに身体を前に倒すと、男は少女の尻に顔を埋めてくる。左右の乳房を吸われ、口に

はペニスをくわえた状態で、男の舌が鎖夜のアヌスををれろねぶりだす。

（ああ……今度はお尻の穴を犯されてしまうのか。くっ、舌が中にまで入って……ッ）

羞恥はあるが、舌の動きを不快に感じるどころか、くすぐったさに快感すら覚えてしまうのが情けない。すでにアナル処女も失った上、鬼怪の卵がA感覚を増大させている。

「ひっひひ、ボテ腹娘のケツの穴の具合はどうだ……そらっ」

「んぐううっっ？」

めりっ。みちみちみち……舌でのほぐしが十分ではなかったにもかかわらず、乙女の菊門は猛った肉竿を飲み込んだ。男はがっちりと骨盤を抱え込むようにして、ゴツゴツと腰を打ちつけてくる。力任せに括約筋をこじ開け、窮屈な尻穴に押し入ってくる。

「おほおおっ、ケツの締まりは最高だな、たっぷり注いでやるぜ！」

「んぐ、んふうう、ふむおおお……ッ」

膝立ちの格好で、鎖夜は尻を犯され、喉を犯され、母乳を搾り続けられる。息は詰まり、アヌスは灼け、ニップルはひりひり痛いのに、少女の肉体はそれをすべて愉悦として受け取っている。

（ああああっ、お尻の穴を、男性器が出たり入ったり……苦しいッ、苦しいけど……くるしいのが、気持ちいい……ッ！）

ザーメンを飲まされたときの軽いアクメの余韻は、消えずに残っている。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！ <http://ktcom.jp/> 検索

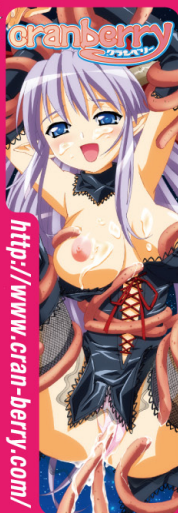


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



<http://www.comic-alkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!